

宮本 武蔵著「五輪書」

岩波文庫 岩波書店 1985年2月18日刊を読む

五輪書（ごりんのしょ）

1. 大きなる所よりちいさき所を知り、浅きより深きに至る。
2. 剣術一通の理、さだかに見わけ、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つとふ心は千万の敵にも同意なり。将たるものの兵法、ちいさきを大きになす事、尺のかたをもって大仏をたつるに同じ。か様の義、こまやかには書分けがたし。一をもって万と知る事、兵法の利也。
3. 太刀の徳よりして世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得てが、一人にして十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人して千人にかち、千人にして万人に勝つ。然るによって、わが一流の兵法に、一人も万人もおなじ事にして、武士の法を残らず兵法といふ所也。道におゐて、儒者・仏者・数寄者・しつけ者・乱舞者、此等の事は武士の道にはなし。其道にあらざるといふとも、道を広くすれば、物事に出であふ事也。いづれも人間におゐて、我道道をよくみがく事肝要也。

P22 ~ 23

- 2010年2月18日 林明夫記 -